母性同一性と子どもの適応に関する研究

山下文雄（久留米大小児科）
橋爪広好（　〃　）
板井修一（　〃　）
七浦久子（　〃　）
小串　武（　〃　）
田中敏明（　〃　）
秋山俊夫（　〃　）

今回は三つのテーマで研究を行なった。一つは母子関係の心理的距離の測定に関する問題である。

第二は，母性同一性の変容を投影法の手段によりとらえようとした。

第三の研究は，母性意識が時間の経過につれ，どのように変容するかをみるだけでなく，それが妊婦をとりまく環境，妊婦自身の特質により，どのように影響されるかをみようとしたものである。

研究Ⅰ　母と子の心理的距離の測定に関する研究

目　　的

母親と子どもの心理的な距離は，母親と子どもとの空間的な距離のとり方に投影されると考えられる[3)4)]。例えば子どもとの分離のできない母親は，常に子どものそばに居ようとするだろう。また逆に，子どもに対し拒否的な感情を強くもつ母親は，子どもとの間に広い空間的距離をとると考えられる。

そこで，この研究では，子どもの年令により距離のとり方の違いがあるか，母と子の向き合う位置と母子間の距離，母性同一性と母子間の距離の関係についてみようとした。

方　　法

被検者：5才以下の幼児の母親25名（幼児群）と小学校1年，3年，5年の子どもの母親19名（学童群）の44名を対象にした。

テスト：二つのテストを実施した。一つは，早稲田大学の小嶋らが考案した「母子関係調査法」を，集団的に実施できるように，改めたものである[3)]。

もう一つのテストは，母性同一性テストで，これは「子ども好きか」とか「子どもが生まれてどんな気持だったか」等，母親の子どもや育児に対する感情や態度を開くものである。

結　　果

各図版ごとに，子どもの絵と母親カードとの間の距離を比較した。表1（左）に示すように，幼児群の方が学童群にくらべ，子どもの絵のよりそばに母親カードを置く傾向がうかがわれた。しかし統計的に有意差の認められたのは，3番目と11番目の図版だけだった。

母親カード別にも，母親カードと子どもの絵の間の距離をみた。表1（右）のように，幼児群の方が，学童群にくらべ，母親カードを子どもの絵の近くに置いていた（母親カード4と5のみ統計的に有意差）。

次に母親カードを子どもの絵の向きに対し，どの方向にむけて置いたかについてみた。表2（左）に示すように，両群とも子どもと母親が互いに向きあうように母親カードを置くことが最も多かった。次に多かったのは，母親が正面を向き，子どもの姿を見ていなかったようにみえるものであった。3番目に多かったものは，子どもの後姿を見る位置に母親カードを置くものであった。こうした母親カードの置き方は，両群ともよく似ていた。

母親カードの置きかた別に，母子間の距離をみた。母子が互いに向きあう位置に母親カードを置いた場合，幼児群では学童群にくらべ有意に母子間の距離が短かかった（表2（右））。

次に，11枚の図版の母子間の距離の平均を各対象者について比較した。全対象者の平均からＩＳＤ以上距離の大きなものとＩＳＤ以上距離の小さいものを選び出し，距離大群，距離小群とした。距離大群（Ｎ＝４）の母子間の距離は平均で8.1cm，距離小群（Ｎ＝７）は，4.1cmであった。この２群の母性同一性得点を比較した結果，有意差は認められなかったものの，距離小群は距離大群にくらべ母性同一性得点は高くなっていた。

研究Ⅱ　妊婦の母性同一性に関する研究

目　　的

母性同一性の形成は，妊娠による身体的変化を容体化し受容してゆく過程の中でなされると考えられる。その過程にかかわる要因として，妊婦自体の特質や妊婦をとりまく環境の影響などがあげられるであろう。

本研究では，妊娠による身体的変化の受容度と妊娠に対する意識的・無意識的感情の表出との関連，および妊娠期の経過に伴う意識的・無意識的感情の変化について検討を行なう。

方　　法

被験者：妊娠初期（２～４ヶ月）７名，中期（５～７ヶ月）12名，後期（８～10ヶ月）34名，出産後22名。同一妊婦に対し数期にわたり諸調査を実施した。平均年齢は26.6歳。すべて初産婦である。

テスト用具：(1)自己像画――Ｂ５版の用紙に全身の自己像画を描くよう教示した。(2)ロールシャッハテスト――10枚のカードに対し３個ずつの反応を求め，Fisher, S.とCleveland, S.（1968）の採点方法を参考にBarrier反応，Penetration反応に各々１点ずつ与えた。(3)Body buffer zone test[6]――夫婦関係を空間のとり方によって調査する。テストは普通，ストレス，親和の３場面より成り，夫と妻の各々を固定した場合の相手の位置を測定した。

結　　果

自己像画に対し８項目の形容詞対尺度で14名の評定者が５段階評定をした。この平均得点と身体各部の欠如や描画線などのチェックによる障害得点，および妊娠期による腹部の変化の有無の３側面から総合評価をし，Body Image上位群（全体の$\frac{1}{3}$，n＝11），下位群（n＝９）を抽出した。

ロールシャッハテストよりBarrier得点とPenetration得点を採点し各期ごとに両得点間の相関係数を算出した。その結果，妊娠初期では$r=-0.645$，中期$r=0.276$，後期$r=0.390$，出産後$r=-0.173$であった。この結果から，妊娠中期後期では身体的変化が顕著になるほど身体像境界が明確で身体に対し肯定的感情を抱くと同時に，身体像境界が弱く身体に対し否定的感情をも抱くといったアンビバレントな感情状態にあるといえるのではなかろうか。またBody Imageの上位群，下位群でのBarrier得点，Penetration得点の相関はそれぞれ$r=0.366$，$r=0.687$（$P<0.05$）で，身体的受容度の低い者ほどアンビバレントな感情状態が強いと考えられる。

夫婦関係においては，普通，ストレス，親和の３場面間の空間のとり方の相関係数を算出した（表３）。妻よりのアプローチ，妻よりみた夫のアプローチとも妊娠期においては，３場面間における空間のとり方に有意な関連がみられるが，出産後には両者の空間のとり方に関連がみられなくなる傾向がある。すなわち，妊娠期には夫婦間の関係が状況によって流動的に変化するが，出産後には状況の変化にかかわらずある一定の距離のとり方が固定するようになると思われ，出産の前後では夫婦関係の在り方が変化すると考えられる。このことより，出産は夫婦関係にとって危機的なでき事ととられることもできよう。

次に妻よりのアプローチの距離と，妻よりみた夫のアプローチの距離のズレをみると図１に示すように，ストレス場面で妊娠期と出産後間に有意なズレ（$t=3.40$，$P<0.01$）がみられた。これは夫婦関係における認知的な行動のズレが妊娠期に強くみられることを示しており，この時期の不

安定な感情を表明していると思われる。また，妻よりのアプローチの距離と妻よりみた夫のアプローチの距離との差がプラスかマイナスかを検討した。距離の差がマイナスの場合，妻の方が妻よりみた夫よりも空間のとり方が短いことを示す。すなわち，自己に対し自信，自己安定性，自己開放性などの肯定的なイメージが基本にあり，他者に対する接近行動も積極的，能動的なものとなると考えられる。他方，距離の差がプラスの場合，妻の方が妻よりみた夫よりも空間のとり方が長いことを示す。すなわち，自己に対し自己否定的，自己懐疑的，自己不安定感などの否定的なイメージが基本にあり，他者に対する接近行動も消極的，受動的なものとなると考えられる。そこでBody Image の上位群下位群に関して検討すると，下位群は上位群に比較して距離の差の符号にマイナスが少なく，プラスが多い傾向であった（$x^2=3.085$, $P<0.10$）。したがって，身体的受容度の低い者ほど自己に対し否定的なイメージが強く，夫に対する接近行動も消極的，受動的なものとなりやすい傾向にあるといえるのではなかろうか。

以上より，妊娠期には不安定感を抱きやすい傾向があり，特に妊娠に対し不適応で否定的な感情をもつ場合，不安定で消極的な自己像をもっていることが明確にされた。

この様なとき，これまでの自己像の中に母親としての自己をとり入れ再統合するのに，なんらかの障害となるのではないかと考えられる。

研究Ⅲ　妊娠・出産による母性意識の変化とその規定要因 ―SCT反応を中心に―

目　　的

結婚前から出産後数年を経過するまで，妊娠，出産を契機として母性意識がどのように変化するかを明らかにするとともに，夫や結婚生活，実の両親との関係，妊娠や出産への感情などと母性意識との関係について検討する。

方　　法

被験者：次の4群を対象とする。C1：女子短大生（N＝39），G2：平均26週を経過した妊娠中の女性（N＝31），G3：第1子出産後平均8ヶ月を経過した母親（N＝12），第1子出産後平均4年を経過した母親（N＝13）。

手続：次の3種の検査を実施し分析する。

①SCT－PKS－妊娠，出産，夫，結婚，自己の過去，現在，将来，子ども，両親等の主題とする文章完成検査。SCTの記述をもとに，妊娠や出産への感情（苦痛・恥ずかしさ），夫や結婚生活，実の両親への肯定的，否定的反応，および母性性反応（出産の喜び，いたわり，愛着，心配，受容的接触）を抽出し得点化する。

②G2，G3，G4を対象に，保護，拒否，干渉，服従，期待，注意，不安，矛盾，不一致の8因子からなる育児態度検査を実施する。

結　　果

1.　SCTに表出される母性意識の変化

SCTに表出される母性性反応を群ごとに単純平均するとG1＝1.32，G2＝1.77，G3＝2.00，G4＝1.67となり，有意差を認められないものの，妊娠を契機に母性意識が上昇し，出産直後が最も高くなり，その後やや下降する傾向がうかがえる。育児態度においても，出産後しばらくの間は，保護，服従，注意，不安への偏りが大きいが，その後次第に拒否，干渉，期待の方向に移行する。

SCTの各項目の反応においても群差を認めることができる。たとえば，「子どもが泣きやまないと」に対しては，G1とG4では「あやす」や「イライラする」反応が多く，G3とG4では「病気ではないか心配する」，「悲しくなる」の反応が多く出現する。「乳房」に対しては，G1とG4は単純な大，小を，G3とG4は「母乳がでるか心配」「母乳を飲ませることができてよかった」を記述する傾向が強い。

2.　母性意識に関連する諸要因

表4は母性意識に関連することが予想される4つの要因について，各要因に言及した記述の有無あるいはその程度と母性意識の程度との関係を示

示したものである。

妊娠，出産に対する苦痛反応についてみると，苦痛反応を記述しないS_3の母性性得点が若干高くなっているものの，度数，平均値とも有意差は認められない。これに対して，妊娠や体型の変化を恥ずかしいものととらえる者は母性意識が低くなりがちである（$x^2 = 4.99$，df＝1，P＜.05)。

母性意識と，母親の実の両親に対する記述の内容との間には明白な関係を認めることができる。すなわち，両親への感情や両親が自己に向ける態度，感情を肯定的，受容的に表現する（以下両親性と言う）者の多くは母性意識が高い（$x^2 = 15.31$，df＝1，P＜.001）。さらに，夫や結婚生活に対する満足度が低くても，この両親性が高い者は一般的に母性意識が高い傾向がある。このことは，母親自身が受けた養育がその母親の母性意識に強く影響することを予想させる[2)]。

夫や結婚に対する満足度が高い者には，母性意識の高い者が多い傾向があるもののその差は有意でない。

3. 特徴的な２事例

母性意識と前述の要因との関係を具体的に裏付ける２事例について取り上げる。

Case 1：M．O．（33才），夫や結婚生活への不満が大きく（結婚満足度－5，夫への満足度－7），夫の両親との関係も悪いが，実の両親との関係は良く，実の両親の暖かさが現在の支えになっている。母性意識が高く，その高さが過保護，服従，注意不安という子どもべったりの態度をとっている。

Case 2：S.U（22才），実の両親が離婚しており，冷たい家族であったことをうかがわせる記述が目立つ。特に母親に対する反感が強い。結婚生活は満たされていると思われるにもかかわらず（結婚満足度＋2，夫への満足度＋19），育児態度は子どもに対して極めて拒否的で，矛盾性や干渉性も平均に比べてその傾向が大きい（図２）。

表1　図版別（左表），母親カード別（右表）にみた母子間の距離

		幼児群 X（SD）	学童群 X（SD）	t検定
子どもの図版	1	5.7(3.04)	7.4(3.11)	ns
	2	6.0(3.12)	6.3(3.06)	ns
	3	4.5(2.13)	6.2(3.25)	2.189*
	4	6.2(3.60)	5.1(1.85)	ns
	5	5,8(2.62)	6.6(2.75)	ns
	6	5.9(3.05)	7.0(3.15)	ns
	7	5.5(3.07)	6.1(2.99)	ns
	8	4.3(2.19)	4.8(2.23)	ns
	9	6.6(2.49)	7.0(2.49)	ns
	10	5.4(2.84)	6.9(2.67)	ns
	11	4.4(1.64)	6.1(3.11)	2.474**

*……p<.05　**……p<.02

		幼児群 X（SD）	学童群 X（SD）	t検定
母親カード	1	5.3(2.22)	5.5(2.03)	ns
	2	5.4(2.46)	5.7(2.57)	ns
	3	5.6(2.90)	6.1(3.01)	ns
	4	4.3(1.95)	6.2(2.46)	2.973*
	5	6.5(3.30)	8.8(3.31)	3.207*
	6	5.7(3.19)	6.1(2.71)	ns
	7	5.9(2.97)	6.5(2.49)	ns
	8	4.4(2.40)	4.7(1.89)	ns

*……p<.01

表2　母親カードの置きかた（左表）と母子間の距離（右表）

		幼児群 N（%）	学童群 N（%）	全体 N（%）
子どもの向きと母親の向き	pq	116(34.2)	75(36.0)	191(34.9)
	pp	75(22.1)	45(21.6)	120(22.0)
	pP	42(12.4)	16(7.7)	58(10.6)
	qP	10(3.0)	6(2.9)	16(2.9)
	♀p	94(27.7)	64(30.8)	158(28.9)
	距離測定不能	2(0.6)	2(1.0)	4(0.7)
計		339(100)	208(100)	547(100)

		幼児群 X（SD）	学童群 X（SD）	t検定
子どもの向きと母親の向き	pq	5.4(2.79)	6.6(3.05)	2.783*
	pp	6.0(3.16)	6.3(2.47)	ns
	pP	4.8(2.68)	5.8(3.66)	ns
	qP	6.2(3.11)	7.8(3.89)	ns
	♀p	5.6(2.78)	6.0(2.65)	ns

* …… $p < .01$

（注）　例えば、Pは母親をあらわし、右向きであることを示す。qは子どもが左向きであることをあらわす。♀は母親が正面向きであることをあらわす。

表3　3場面間の相関

妻よりのアプローチ

	普　通	ストレス	親　和
普　通		0.496 **	0.687 **
ストレス	0.512 °		0.405 **
親　和	0.545 *	0.515 °	

妊娠期　出産後

妻よりみた夫のアプローチ

	普　通	ストレス	親　和
普　通		0.473 **	0.701 **
ストレス	0.277		0.474 **
親　和	0.526 °	0.227	

妊娠期　出産後

° P < 0.10　* P < 0.05 ** P < 0.01

表4　SCT反応にみられる，関連要因と母性性との関係

関　連　要因		母性性 (N) 高	母性性 (N) 低	母性性 $(\bar{x})$
妊娠に対する苦痛反応	有	13	14	1.54
	無	17	11	2.04
妊娠に対する恥反応	有	2	7	1.00
	無	30	18	1.94
結婚満足度	高	21	7	2.29
	中	8	8	1.38
	低	2	9	1.18
実の両親への肯定的反応	高	19	5	2.25
	低	4	16	1.00

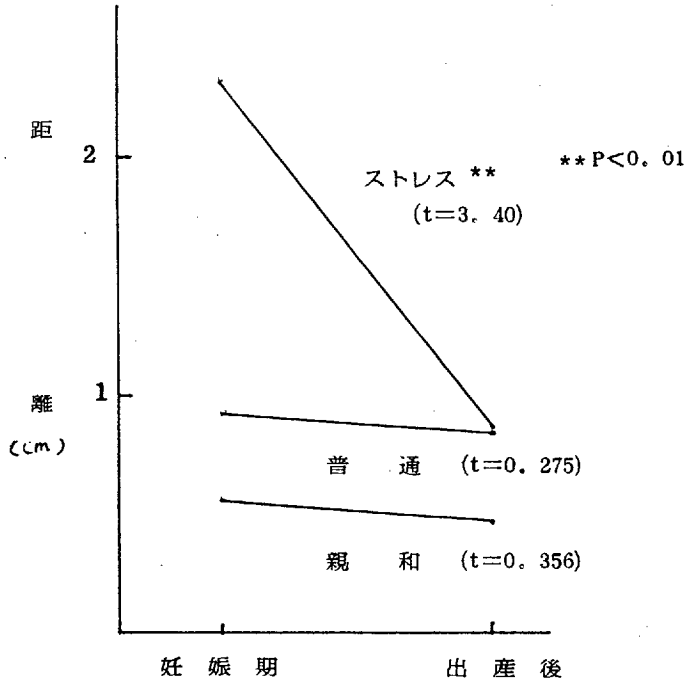

図1　妻よりのアプローチと妻よりみた夫のアプローチの距離の差

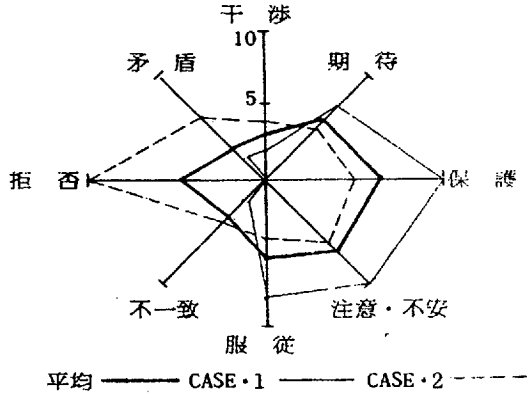

図2　特徴的2事例の育児態度

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目　的

母親と子どもの心理的な距離は,母親と子どもとの空間的な距離のとり方に投影されると考えられ。例えば子どもとの分離のできない母親は,常に子どものそばに居ようとするだろう。また逆に,子どもに対し拒否的な感情を強くもつ母親は,子どもとの間に広い空間的距離をとると考えられる。

そこで,この研究では,子どもの年令により距離のとり方の違いがあるか,母と子の向き合う位置と母子間の距離,母性同一性と母子間の距離の関係についてみようとした。

母性同一性の形成は,妊娠による身体的変化を容体化し受容してゆく過程の中でなされると考えられる。その過程にかかわる要因として,妊婦自体の特質や妊婦をとりまく環境の影響などがあげられるであろう。

本研究では,妊娠による身体的変化の受容度と妊娠に対する意識的・無意識的感情の表出との関連,および妊娠期の経過に伴う意識的・無意識的感情の変化について検討を行なう。結婚前から出産後数年を経過するまで,妊娠,出産を契機として母性意識がどのように変化するかを明らかにするとともに,夫や結婚生活,実の両親との関係・妊娠や出産への感情などと母性意識との関係について検討する。